

# 関宿城跡

—東葛飾郡関宿町久世曲輪に所在する関宿城確認調査概報—

1986

千葉県教育委員会  
財団法人 千葉県文化財センター

# 関宿城跡

—東葛飾郡関宿町久世曲輪に所在する関宿城確認調査概報—



1986

千葉県教育委員会  
財団法人千葉県文化財センター

## 序　　分

関宿町は、千葉県の最北端に位置し、東葛飾郡の中でも純農業地帯でしたが、近年では住宅、工場等も建ちはじめ、徐々に都市化の波が押し寄せております。

また、この町は近世の城下町であり、徳川幕府が江戸防衛の北の要として、代々譜代大名を配置するなど、その重要性が認識されていた地でもありました。僅か、五万石の大名でしたが、幕府の要職についていたことからも理解できます。

この関宿城は、南側を除く三方を江戸川と利根川に囲まれた、低地に位置した水城でしたが、現在、本丸跡はその一部を残し、ほとんどが江戸川の河川改修工事により、河川敷や堤防下になっています。このため、城郭の様子は、当時の面影をほとんど残していません。

この関宿城の復元については、以前から地元町民の強い希望があり、それに関連して博物館等の公共施設の建設についても、建設促進の要望がありました。

このため、千葉県教育委員会でも関宿城の実態把握を目的として、昭和60年度から歴史史料の調査を開始し、絵図、古文書類等について新史料の発見に努めております。

また、城の規模や遺構等については、昭和61年度から関宿町の協力を得て、本丸跡の発掘調査を開始しました。その結果、本丸を区画すると思われる石垣の一部や掘立柱建物跡の遺構等や古墳時代の埴輪、城に伴う瓦、陶磁器などを検出し、大きな成果を得ることができました。

このたび、その成果をまとめた調査報告書を刊行する運びとなりました。本書が、学術的な資料としてはもとより、関宿城建設のための基礎資料として役立つものと信じております。

最後に、本調査の実施に当たりご協力をいただいた関宿町、関宿町教育委員会はじめ地元の皆様や発掘調査を担当された財団法人千葉県文化財センターに厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

千葉県教育庁

文化課長 竹内 一雄

## 例　　言

1. 本書は、東葛飾郡関宿町久世曲輪に所在する近世城郭関宿城跡の確認調査概報である。
2. 調査は、千葉県教育委員会の委託をうけた財団法人千葉県文化財センターが、千葉県教育庁文化課の指導のもとに実施した。
3. 調査は、昭和61年11月4日から同年11月29日にかけて実施した。
4. 調査・整理作業および本書の作成にあたっては、当センター調査部長 鈴木道之助・部長補佐 岡川宏道の指導のもとに、調査研究員 岡田光広がこれを行ない、遺物実測において調査研究員 田形孝一、同 萩原恭一の協力を得た。
5. 本書の執筆・編集は、班長 矢戸三男、岡田が担当した。
6. 本遺跡で使用したコードは、303-001とした。
7. 第1図は、国土地理院発行の5万分の1「水海道」(N J - 54-30-4・昭和57年10月)を使用した。
8. 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県教育庁文化課、関宿町教育委員会をはじめ地元のみなさん、当センター職員等多くの方々から御指導・助言をいただいた。

## 目 次

### 序 文

### 例 言

I.はじめに	1
1. 関宿城跡の位置と環境	1
2. 関宿城略史	1
II.調査の経過と方法	3
1. 調査の経過	3
2. 調査の方法	3
3. 層序	5
III.検出遺構	6
1. 石垣跡	6
2. 溝状遺構	6
3. 建物跡	6
IV.出土遺物	9
1. 瓦	9
2. 土師質土器	12
3. 陶磁器	12
4. 古銭	14
5. 羽口, 蓋形土製品, 鉛玉, 煙管	15
6. 増輪	16
V.まとめ	17

## 挿図目次

第1図 関宿城跡位置図	2
第2図 関宿城跡トレンチ配置図	4
第3図 土層断面図	5
第4図 石垣跡、溝状遺構、001号建物跡実測図	7
第5図 002号、003号建物跡実測図	8
第6図 瓦拓影図(1)	10
第7図 瓦拓影図(2)	11
第8図 土師質土器実測図	13
第9図 古錢拓影図	14
第10図 羽口、蓋形土製品、鉛玉、煙管実測図	15
第11図 増輪実測図	16

## 表 目 次

第1表 古錢計測表	15
-----------	----

## 図版目次

図版 1	1. 調査区遠景（北から） 2. 調査区遠景（北東から）
図版 2	1. 石垣跡（南西から） 2. 石垣跡（西から）
図版 3	1. 001号建物跡（西から） 2. 002号建物跡（北から）
図版 4	1. B 3 - 03区土師質土器出土状況（西から） 2. C 4 - 01区埴輪出土状況（北から）
図版 5	1. 瓦 2. 羽口、蓋形土製品、鉛玉、煙管
図版 6	土師質土器
図版 7	陶磁器

## I. はじめに

### 1. 関宿城の位置と環境（第1図）

関宿城跡は、千葉県の最北端付近に位置する東葛飾郡関宿町久世曲輪230-1他に所在する。現在でこそ、利根川と江戸川の川筋は良く整備され、ともに大流の様相を呈するが、流路を中心として現在見られる地形は、近代からの河川改修工事により成立したものである。同時に、城の本丸跡の約%，及び二の丸跡の大部分と、大手門を含む城内西側は、江戸川河川敷地内に埋没してしまっている。

城跡は現堤防沿の微高地上にあり、全体に標高約10mを測るが、今回発掘調査対象となった本丸跡のみ標高約12mを測る。城跡の北東部に広がる水田面の標高が約9mで、江戸時代度々見舞われた洪水により、城内はその都度冠水の状況を呈していたものと思われる。

視野を周辺に広げてみると、所在する遺跡は多く、各時代にわたる。関宿町内においては、繩文時代の貝塚の分布に注目できる。江戸川沿の微高地上には、雲国寺内貝塚、内町貝塚、東内町貝塚等が所在し、利根川により開拓された支谷に面する台地上には、古布内貝塚、武者土貝塚、飯塚貝塚等が所在する。いずれも大規模な開発等の行為からはまぬがれでいるため、一部を除いて遺存状態は良好である。

また、関宿城跡の北東は、利根川を挟んで茨城県の境町となるが、現在の宮戸川に沿った一帯は、かつて長井戸沼と呼ばれた湿地であった。この長井戸沼に面する微高地上においては、古墳の分布に注目することができる。長井戸沼の東岸には小金井古墳群、南長井戸古墳群等が西岸には横塚古墳群や口明山古墳等が存在する。

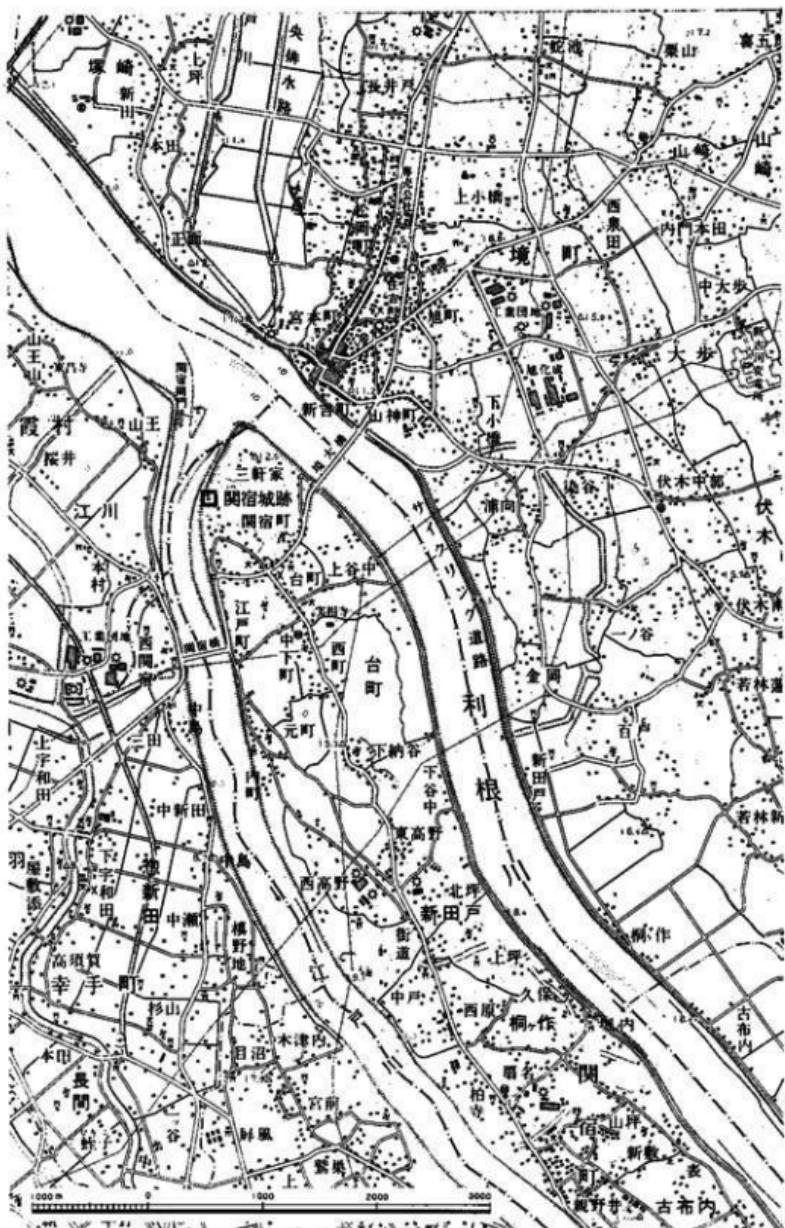
これらは、今後詳細に比較、検討されることで、当地における河川改修前の古地形の復原の上でも、有効な資料になり得るものと思われる。

### 2. 関宿城略史

関宿城の歴史については、既に関宿町教育委員会を中心に、幾つかの文献が発行されているので、ここでは簡単に概略を説明するにとどめる。

関宿城の歴史は古く、鎌倉時代初期には古河城の管轄下で砦として存在したらしい。その後、下野国築田郡の築田満助が室町幕府に仕え、関宿を領有し、城を築いたと言われている。築城の年は、長禄元年（1457）とされる。

しかし、関宿城が城としての性格を整え安定化するのは、天正18年（1590）徳川家康の異父弟である松平康元が、家康の関東入国に伴ない、関宿城に入封されて以後のことである。久世氏の関宿城と言われるが、実際には城主の交替がみられ、松平氏3代の後、小笠原氏2代、北条氏1代、牧野氏2代、板倉氏3代、久世氏1代、牧野氏2代を経て、宝永2年（1705）久世



第1圖 関宿城跡位置図 (1/50,000, 水海道)

重之が入封、以後は明治の廃藩に至るまで久世氏の治世が続いた。重之から始まる久世氏の治世は8代続くが、度重なる洪水等の被害のために城内の修復に追われ、財政には窮する毎日であった。洪水は、江戸幕府の治水事業が原因であるとも言える。江戸を水害から救うために、元和年間（1615～1623）に行なわれたとされる江戸川の東移計画は、関宿を水上交通の要所とし、関所が置かれ繁栄を誇ったが、反面で水害に終始悩まされる環境にしてしまったとも言える。慶応3年（1876）徳川慶喜の大政奉還により江戸幕府が滅亡すると、各地で官軍と旧幕府軍の間で、いわゆる戊辰戦争が始まる。各藩内は、勤皇、佐幕の二派に分かれ内紛状態となるが、多くの藩は勤皇の立場をとり、戊辰の騒乱は鎮静に向かう。しかし関宿藩においては、藩主久世広文が幼弱のため、藩論をまとめることができずに抗争を引き起こすに至った。家老であった杉山対軒は、勤皇論を掲げてこれをまとめようとするが、治まらず、大統督府は広文に隠居、広文の弟広業に藩主を命じた。すなわち広業は幕末最後の城主である。明治4年（1871）に廃藩置県が決ると、翌5年関宿城は廃城と決定、同6年には大蔵省の所管となり、民間に払い下げられ、明治8年頃までには全て破却されたと言われている。

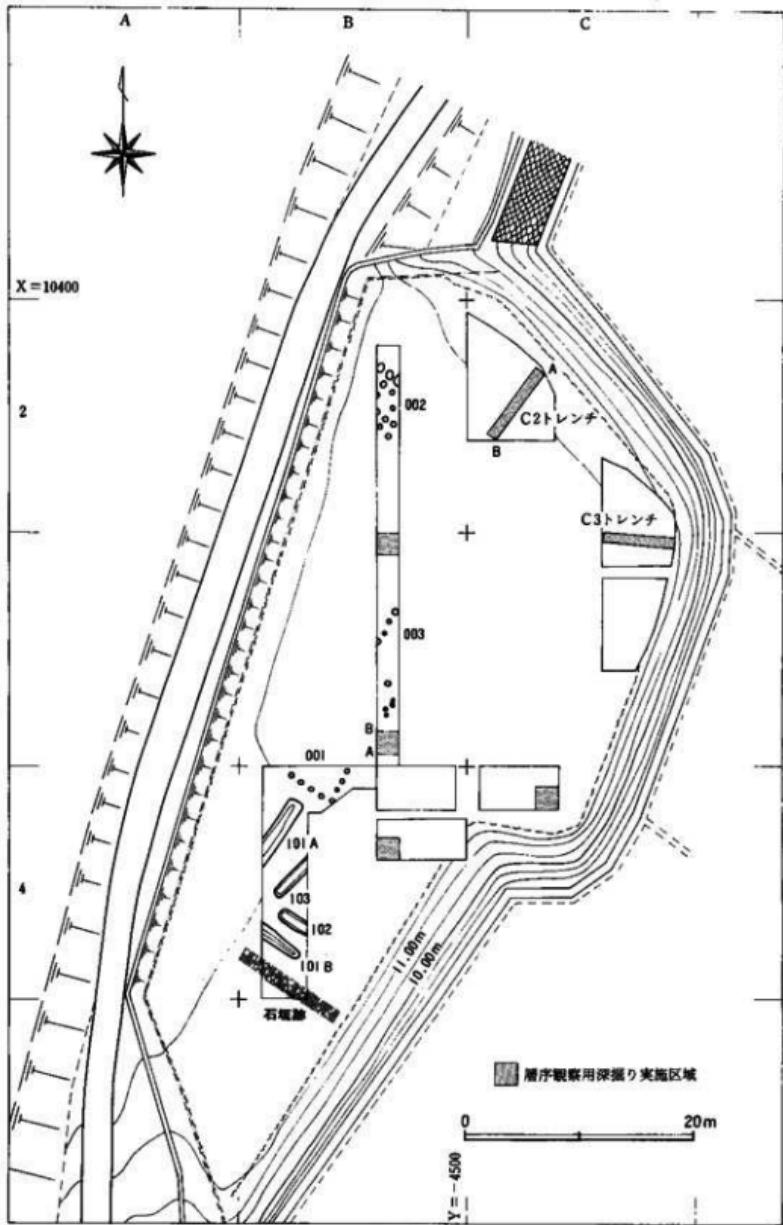
## II. 調査の経過と方法

### 1. 調査の経過

今回の調査は、本丸跡として現存する2440m<sup>2</sup>を対象にした遺構検出を目的とする確認調査である。期間は昭和61年11月4日から11月29日まで、実働21日を数える。調査に先立ち、測量業者に基準点測量を委託した。調査開始日の11月4日に器材搬入及び、トレンチ設定を行ないトレンチを設定次第順次発掘を開始した。比較的好天にも恵まれ、調査は順調に進んだ。11月19日までに上層で建物跡と思われる柱穴列等の遺構を確認し、以後人為的層序確認のための深掘り調査区（2×2m）を設定し発掘を継続した。深掘りにより石垣跡等が検出され、遺構の存在は下層にも及ぶことが判明した。また別の地点で、やはり下層から古墳時代の埴輪を検出する等、調査は予想以上の成果を収めて終了した。発掘調査面積は400m<sup>2</sup>である。

### 2. 調査の方法

調査は公共座標を基準に、20×20mの大グリッドを設定し、西からA、B、C…、北から1、2、3……を付した。さらに大グリッドを4×4mの小グリッドに分割し、北西の隅から東へ00、01、02……、以下南へ10、11、12……、20、21、22……と番号を付した。発掘は幅2mのトレンチを基本とし、出土した遺物は小グリッド単位で取り上げた。上層における遺構の確認作業終了後、層序の確認と下層における遺構の確認を目的に、任意の位置ではあるが深掘り調査区（2×2m）を設定し調査した。



第2図 関宿城跡トレンチ配置図

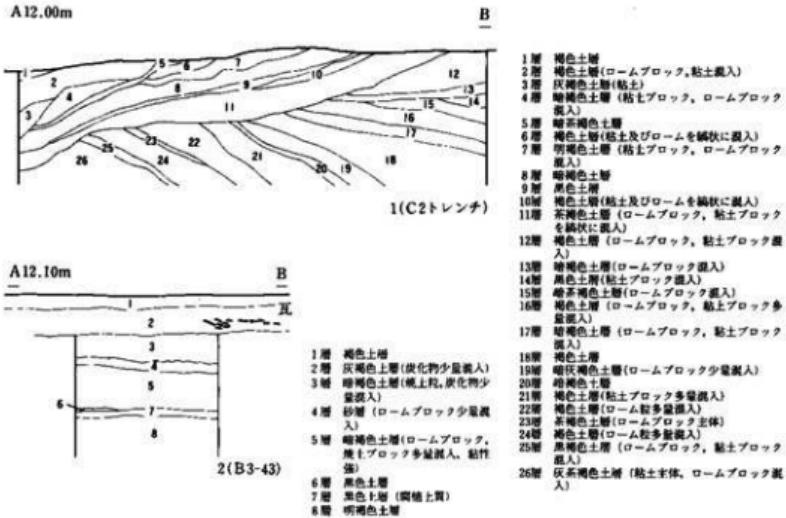
### 3. 層序 (第3図)

関宿城跡の層序は、城の建築に際しての普請による人為的層序のため、観察地点によりその様相は異なる。ここでは特徴的な2地点の層序を例とし、出土遺物のレベルも併せて説明する。

第3図1は調査区の北端に設定したC2トレンチの土層断面である。層序は全て人為的作業の所産によるものであるが、土層の傾斜方向の違いにより大きく2分することができる。図のほぼ半分より上部の層は、下部層を削平後積み上げたものである。大きく分けた上部層と下部層の境界では埴輪片を検出し、一個体分の胸部であることを認めている。

第3図2は、今回の調査区のほぼ中央にあたるB3-43区の土層断面である。第一層は現在の表土である。第2層は明治8年(1875)頃の城の解体に伴なう土層と思われ、棟瓦を主体とする近世後半期の瓦片や、18世紀から19世紀に至る陶磁器等は全て当層からの出土である。第3層は若干砂質を呈する暗褐色土層である。第4層は砂層である。観察では川砂の様相を呈し、洪水による水害時に形成されたものかもしれない。宝暦7年(1757)、安永9年(1780)、元明元年(1781)に領内大洪水との記録も残されている。第5層は暗褐色土層である。当層の上面付近で、墨書きされた土師質土器をはじめとして、土師質土器を主体的に検出している。第6層は黒色土層で、1707年に降灰の宝永火山灰に比定できる層と思われる。第7層は腐植土質の黒色土層で、旧表土と思われる。第8層は明褐色土層で、新期テフラ層と思われる。

なお、柱穴列など建物跡と思われる遺構は、第3層の上面で確認されている。



第3図 土層断面図 (1/80)

### III. 検出遺構

#### 1. 石垣跡 (第4図、図版2-1, 2)

調査区の南端にあたるB4-40区において、深掘り作業開始直後に石積跡が検出された。石垣の方向はW-30°-Nである。石垣は間知石を乱積として石の表を正方形あるいは長方形に加工し、2段ないし3段に積み並べたものと思われ、あまり高くない石積がなされていた。元石を角錐状に加工規則的に配列した切石積の石垣であった。石材は安山岩を用いている。検出面は現地表下約0.9mの深さを測ると同時に、隣接する溝状遺構の検出面からも約0.4m下位にあたる。検出当初は割石や小石群が、約0.8mの幅で帯状の面として出現した。これは切り出した積石の間に埋め込まれた飼石と考えられ、石垣の上位は既に取り壊されていることを示唆する。積石は外面のみ方形に切り出され、外面の大きさは最大のもので40×40cmを測る。それ以外では30×20cm前後のものを標準とする。積石の工法は切石乱積みと呼ばれ、切り出された石材を使用しているものの、その大きさは全て同一というわけではない。さらに裏込に径約20~30cm大の丸石を詰め、外面からの奥行きを0.8mとり、雨水のはけを良くする工夫がとられている。

石垣は既に上位を失っているものの、溝状遺構の検出面より高く築かれていたとは考えにくく、現存高の40cmに溝状遺構検出面とのレベル差40cmを加えた80cm位が石垣高と推定できる。

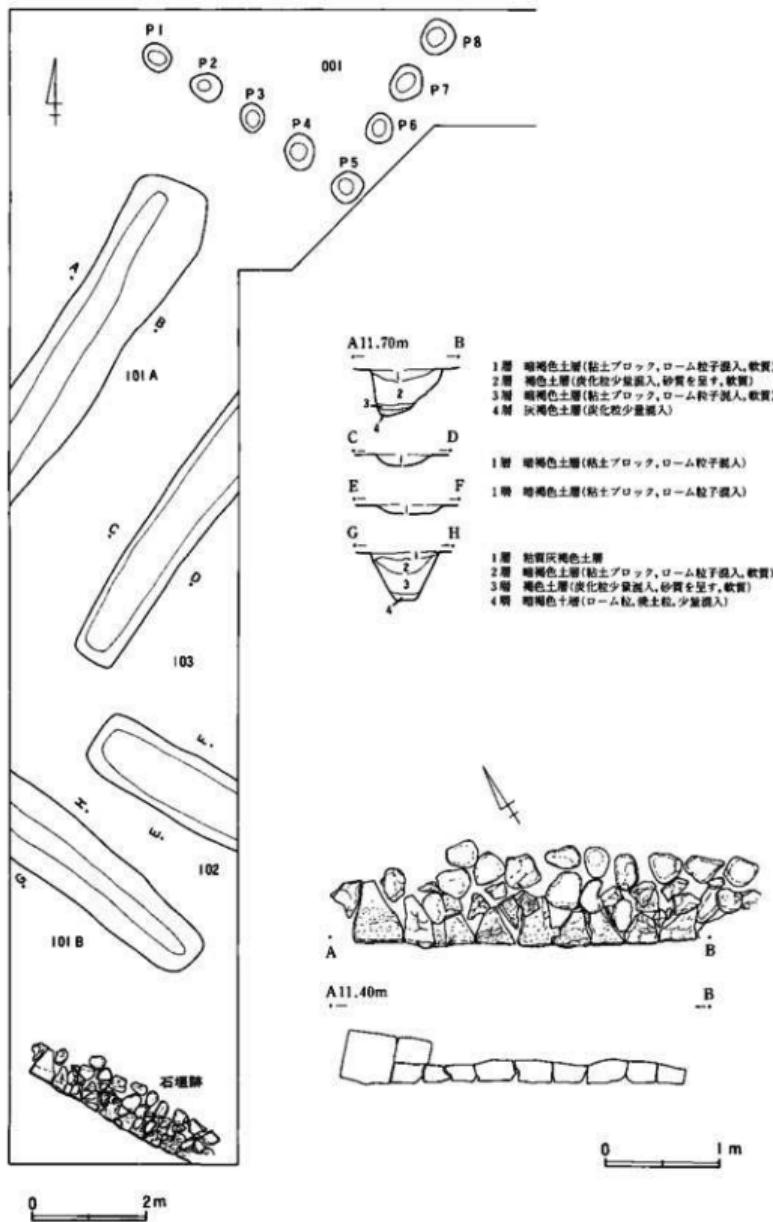
#### 2. 溝状遺構 (第4図)

B4区内に設定したトレンチから、合計4条の溝が検出された。方向的に石垣跡と平行ないし垂直になるもので、4条をもって一つの遺構として把えられるものであろう。このうち101A号溝と101B号溝は、覆土の状況や掘り込みの深度に類似があり、あるいはL字状に連続するものかもしれない。計測値は101A号溝が幅約1.3m、深さ約0.8m、101B号溝が幅約1m、深さ約0.9mを各々測る。覆土はいずれも中層以下で、若干砂質を呈する褐色土層が主体となる。101B号溝と平行する石垣跡までの距離は約2mを測る。102号及び103号溝は、いずれも浅い掘り込みを持つものである。計測値は102号溝が幅約1m、深さ約0.2m、103号溝が幅約0.7m、深さ約0.1mを各々測る。

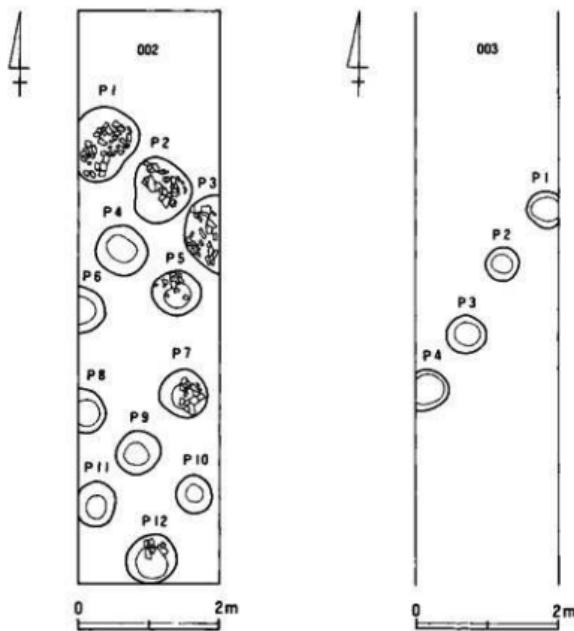
#### 3. 建物跡

##### 001号建物跡 (第4図、図版3-1)

溝状遺構の北側に隣接するB4-01, 02区から検出された。柱穴痕の規模は、平均して径約0.5mを測る。柱穴間は、東西列(P1~P5)では距離約1.0mを測り一定するが、南北列(P5~P8)ではP5, P6間が1.1m、P6, P7間、P7, P8間が各々約0.9mを測り、東西列とは異なる。P3~P6の柱痕内は、瓦の細片をつき固めていた。また、柱穴列の内側は白色粘土を固めた構築



第4図 石垣跡、溝状遺構、001号建物跡実測図



第5図 002号・003号建物跡実測図

面の様相を呈していた。

#### 002号建物跡（第5図、図版3-2）

B2-13, 23区から検出された。トレンチ内で合計12基の柱穴痕を認めている。P1～P3は径約0.8mの規模を測り、多量の瓦片が散かれていた。P4～P12は径約0.6m前後を測るものが多く、やはり瓦片の敷かれたものが認められる。建物の規模については不明であるが、方向は基本的に石垣跡の方向に準じている。また、柱穴間は白色粘土を固めて整地されており、建物自体が重量のある堅固な造りだったことを思わせる。

#### 003号建物跡（第5図）

B3-13, 23区から検出された柱穴列である。柱穴痕は平均して径約0.5mを測るが、柱穴間の距離はP1, P2間が1.2m, P2, P3間が1.3m, P3, P4間が1.1mを各々測り一定しない。柱痕内は瓦細片がつき固められ、001号跡と似た様相を呈している。

## IV. 出土遺物

関宿城跡からは多量の近世瓦をはじめとして、陶磁器、土師質土器（カワラケ）、古鏡等が出土している。また、城とは直接関わらないものの、古墳時代の埴輪がまとまって出土しており、注目できる。以下にそれらの概要を説明してゆくことにする。

### 1. 瓦

#### 軒丸瓦（第6図1～3）

1～3はいずれも破損品である。瓦当部の推定径は14～16cmで、文様は三つ巴文が用いられる。三つ巴文の珠文数は推定で16を数える。

#### 軒瓦（第6図4～8）

4～8は垂れ部のみであるので、軒平瓦か棟瓦かの区別はつけ難く、単に軒瓦とした。4は垂れ部長さ5cmを測り、文様は線の細い唐草文が用いられる。5は垂れ部長さ4cmを測り、瓦当部の断面形はへの字形を呈す。6～8はやはり垂れ部長さ4cmを測るが、瓦当部は5よりも薄く、より軽量化されるものである。文様はいずれも太い線による唐草文である。

#### 棟瓦（第6図9～第7図14）

棟瓦は17世紀の後半に考案されたと言われているもので、軒丸瓦と軒平瓦が一体となった瓦である。これにより瓦の軽量化が図られた。

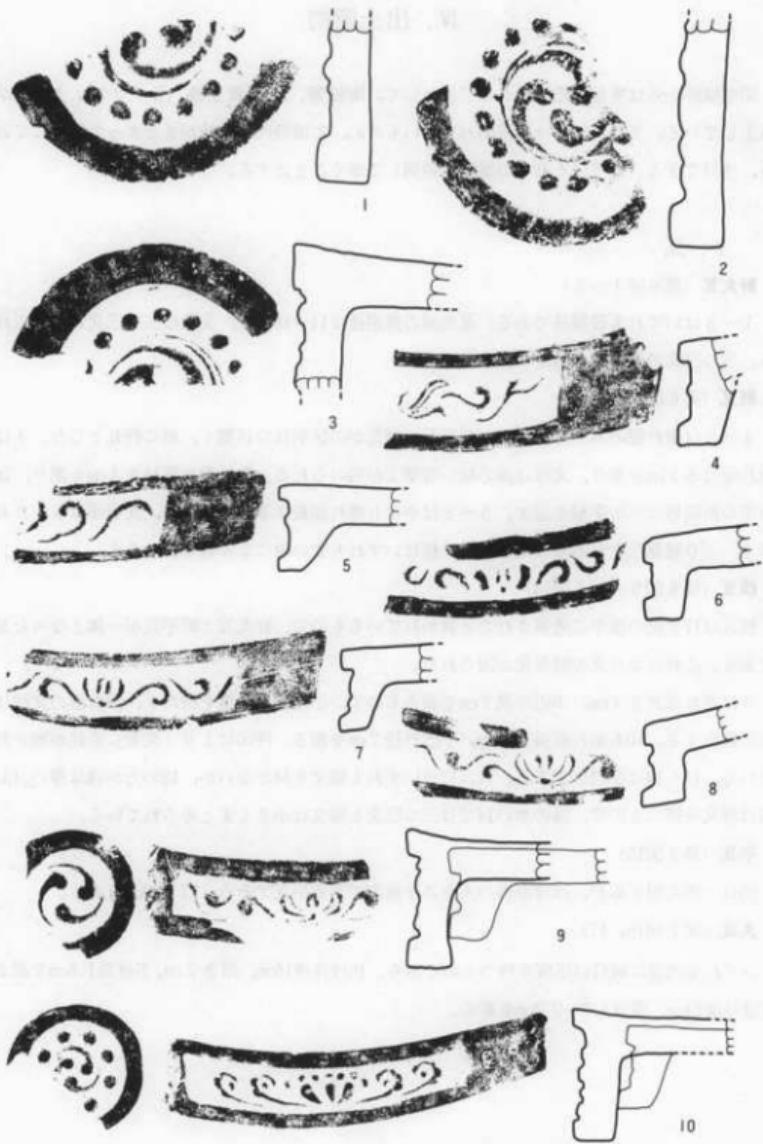
9は垂れ部長さ4cm、小巴外径7cmを測るもので、小巴部に珠文を持たず、垂れ部の文様は8に類似する。10も垂れ部長さ4cm、小巴外径7cmを測る。押印により「柴安」の銘が施されている。11～14は小巴部である。11、12はいずれも珠文を持たないが、12の方が縁は厚い。13、14は珠文を持つもので、縁の厚い14では三つ巴文と珠文は小さくまとめられている。

#### 平瓦（第7図15）

15は一部欠損するが、ほぼ原形の大きさを推定できる平瓦である。27×20cmを測る。

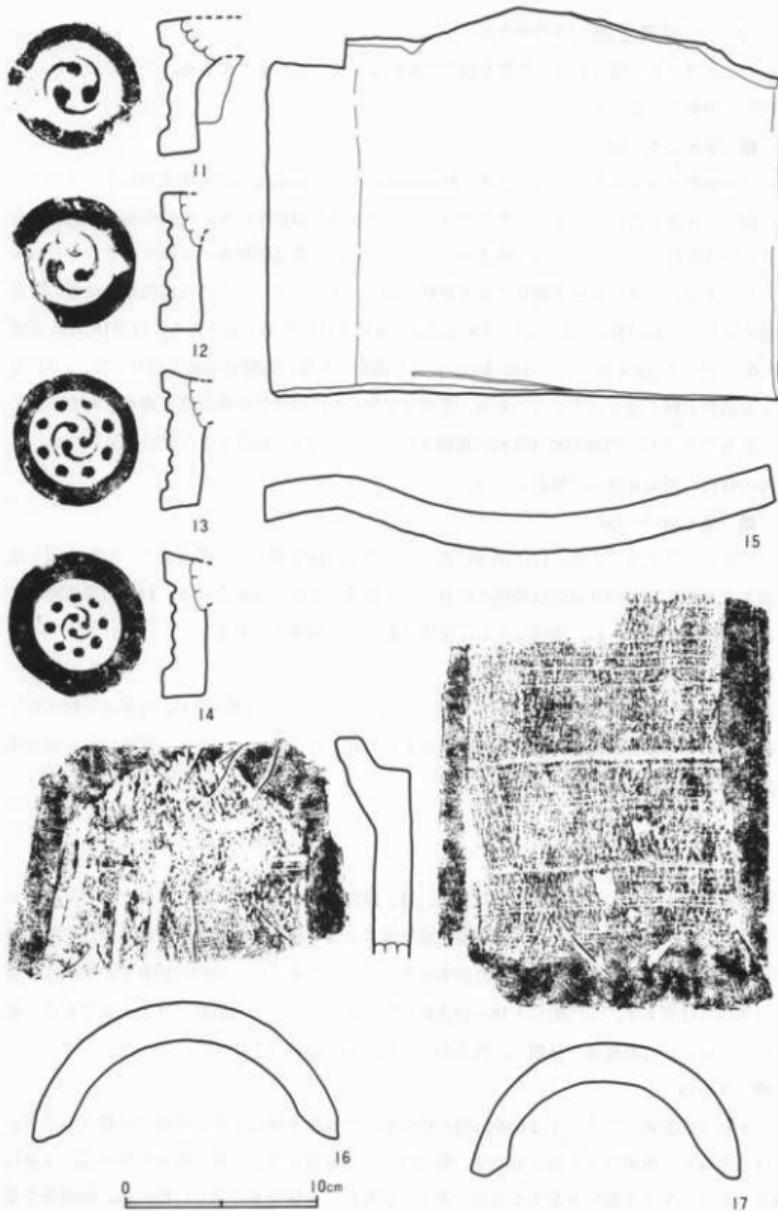
#### 丸瓦（第7図16、17）

いずれも内面に縄目の圧痕を持つものである。16は外径16cm、厚さ2cm、玉縁長1.8cmを測る。17は外径14cm、厚さ1.7～2.2cmを測る。



0 10cm

第6圖 瓦拓影圖(1)



第7図 瓦拓影図(2)

## 2. 土師質土器 (カワラケ)

一般にカワラケと呼ばれる土師質土器が比較的まとまって出土している。ここではそれらを形態的に分類し、説明する。

### I類 (第8図1~12)

环形の器形を呈するもので、口径9~10cm、器高2.5~3cm前後を測る中型器以上の土器である。器形は体部が直線状、または外反ぎみに立ち上がるものが多いため、比較的器高の低い3や7、及び底部径の小さい12では内湾ぎみに立ち上がる。底部は回転糸切り後未調整のものがほとんどであるが、3のみヘラ削りによる調整を施す。また、7にのみ口端部内面に油煙の附着が認められた。10はB3-43区の表土下約1.2mで検出された墨書き土器である。口径10.2cm、底部径5.0cm、器高2.7cmを測る。内外面はナデにより調整される。底部は回転糸切りの後、ヘラ削りによる調整が軽く施されるようである。墨書きは字体から江戸時代中期以降に書かれたものであると推測できるが、内容的には資料の類例を他に見ないため、判読するまでは至らなかった。今後の資料の増加を待って検討したい。

### II類 (第8図13~15)

皿形を呈するものである。口径10cm前後、器高2cm前後を測る。底部は全て、回転糸切り後未調整である。13の内外面には油煙の附着と二次焼成の痕跡が認められる。14の口端部内面にも油煙の附着が認められ、燈明皿として使用されたことが考えられる。

### III類 (第8図16~21)

口径5~6.5cmを測る小型のものを一括した。全てロクロにより整形され、底部は回転糸切り後調整されるもの(18, 20, 21)と未調整のもの(16, 17, 19)がある。観察により油煙等の附着が認められるものはなかった。

## 3. 陶磁器 (図版7)

陶磁器は碗を主体に、皿、徳利、灯火具、鉢、擂鉢等が出土した。これらは全て日常雑器と呼べるもので、18世紀に入り、清朝磁器の輸出復活による海外需要の減少が起り、肥前、瀬戸を中心に国内向け生産が活性化した結果普及したものであろう。今回の調査での検出は、量的に多いとは言えず、年代的にも18~19世紀に広く使用されていた製品がほとんどであると思われるため、一応器種毎に分類し、代表的な写真のみを掲載した。

### 碗 (1~10)

1~10は磁器碗である。1は松を三角形状に配した文様を描出する。器面には貫入がある。2は直線的な二重網目文を描くもので、高台内には「富貴長春」の銘が描かれている。3は口縁部がやや外反する器形を呈するものである。窓枠状に文様を6分割し、松、竹、梅が各々2ヶ所づつに描かれている。また、見込には竈も描かれ、内容は縁起に富んでいる。4は薄手の



第8図 土師質土器実測図

作りで、口径10.0cm、高台径3.9cmを測る。5は高台内に「大明年製」の銘が描かれている。6は底部が厚く、具須の色調は淡い。高台には砂目が残る。7は曲線的な二重網目文を描くもので、高台にはやはり砂目が残る。8は高台である。9はやや胎土が粗いもので、全体に貫入が入る。高台内はかなり崩した字体で「大明（年製）？」が描かれる。10は胎土が暗灰褐色を呈する。全体に貫入が入り、高台には砂目を残す。

#### 皿（11～15）

11を除いて陶製である。11は見込の中央に五弁花と思われる文様を施す。12は縁釉を比較的厚く施す。13は器内面を主体に鉄釉を施す。14は志野焼で、唯一16世紀後半の所産と思われるものである。15は全体に乳白色の釉が施されている。

#### 灯火具（16, 17）

16は台付の灯明皿である。磁器製で、全体に細かな貫入が入る。一部に油煙の附着が認められる。17は陶製の灯明皿である。上面にのみ釉を施し、やはり細かな貫入が入る。

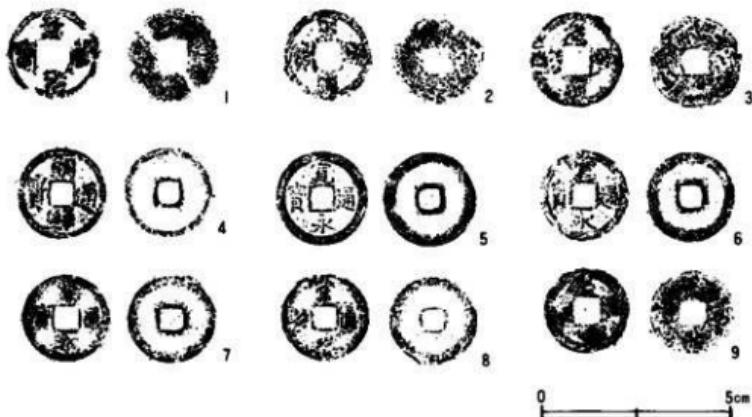
#### 徳利（18）

18は陶製の徳利底部である。胴下部がやや膨らむ器形を呈するものようである。

#### 4. 古銭（第9図）

古銭は9枚出土している。全て銅銭で、鏽化により文字の不鮮明なものが多い。

1～4は渡来銭で、1は景祐元宝、2は皇宋通宝、3は元豊通宝、4は朝鮮通宝である。5～8は江戸時代の代表的銭貨である寛永通宝で、いわゆる新寛永に属する。9は文字不鮮明のため判読できなかった。なお、計測値等は別表を参照されたい。



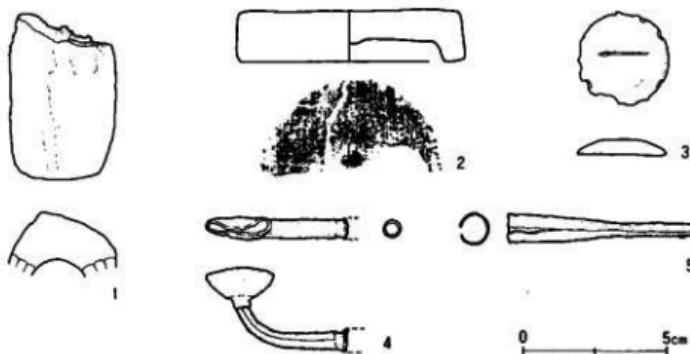
第9図 古銭拓影図

第1表 古銭計測表

No	名 称	出土区	初鑄年	直径(cm)	穿径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	景祐元宝	C 2 - 20	1034	24.50	7.45	1.27	2.32	
2	皇宋通宝	B 4 - 03	1039	24.10	6.90	1.00	2.05	
3	元豐通宝	B 2 - 33	1078	24.30	7.50	1.26	3.38	
4	朝鮮通宝	B 4 - 13	1423	23.80	6.00	1.40	3.07	
5	寛永通宝	B 4 - 13	1668	24.90	5.40	1.47	3.89	新寛永
6	寛永通宝	B 4 - 01	1668	23.50	6.00	1.29	2.92	新寛永
7	寛永通宝	B 4 - 40	1668	23.10	6.55	1.00	2.32	新寛永
8	寛永通宝	B 4 - 01	—	23.25	6.05	1.17	2.50	
9	不 明	B 4 - 13	—	23.00	6.90	1.00	2.37	

## 5. 羽口, 蓋形土製品, 鉛玉, 煙管(第10図)

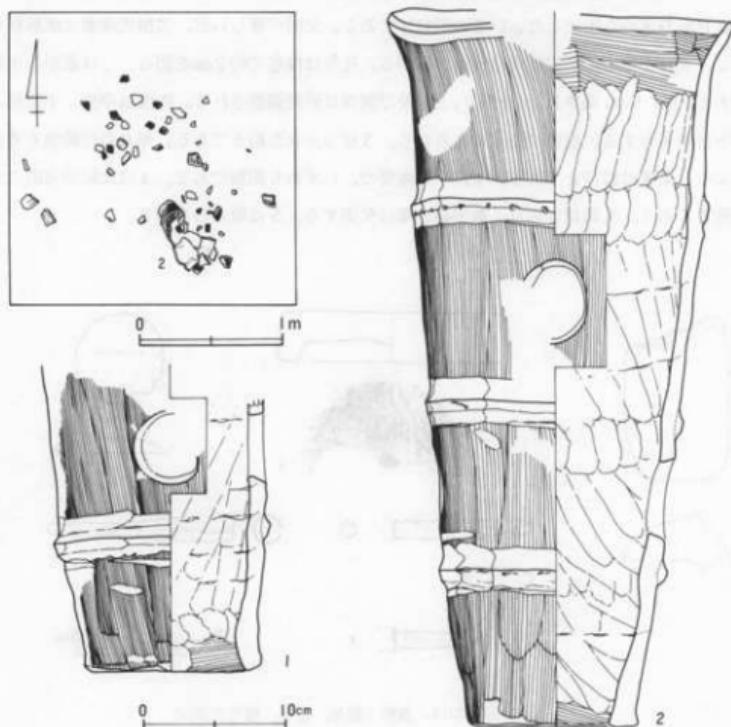
1はB3-23区から出土したふいごの羽口片である。欠損が著しいが、欠損先端部に溶解鉄が附着し、それを中心に二次焼成の痕跡が広がる。孔径は推定で約2cmを測る。2は蓋形の土製品である。径7.6cm、高さ1.7cmを測り、上面及び側面は研磨調整される。内面は中央に小突起、及び布目痕を有する。塩壺の蓋と考えられる。3はつぶれた鉛玉である。弾丸の可能性も考えられよう。重量は27.7gである。4、5は煙管で、いずれも銅製である。4は比較的火皿の大きい雁首である。火皿はつぶれ、羅字結合部は欠損する。5は吸い口である。



第10図 羽口, 蓋形土製品, 鉛玉, 煙管実測図

## 6. 塗輪（第11図）

人為的層序確認のための深掘り作業中に、C4-01区及びC2トレンチ内の2ヶ所から、古墳時代の円筒埴輪を検出している。検出された標高は、いずれも10.60m前後を測る。C4-01区における埴輪の出土状況を図示したが、当検出面は城の版築層に統いて検出された旧表土層と、新期テフラと思われる褐色土層のうちの褐色土層上面付近にあたる。埴輪は基底部も含めた全体が倒れた状況を呈していた。当初円筒埴輪1点の単独出土と思われたが、最終的には3個体以上の円筒埴輪であることが判明している。1は第1段高9~10.5cm、底径12.3cmを測り、基底部の成形は、高さ6.5cmの粘土板が用いられる。凸帯の突出は0.6cmで、断面台形を呈するが、下稜は弱い。透孔はやや縦長の円形で、長径5.2cmを測る。外面の調整は縦位の一次ハケ目のみ施されている。2は平均器高49.0cm、口径24.0cm、底径11.7cmを測るものである。第1段から第4段までの高さは、1段から順に10.9cm、11.2cm、14.2cm、12.7cmを測る。凸帯の突出は0.6cmで断面台形を呈するが、下稜はかなり弱い。透孔は縦長で、長径5.7cm、短径4.6cmを測る。調整は外側が、縦位の一次ハケ目のみで、内面は基底部と口縁部に横位のハケ目を施している。



第11図 塗輪実測図

## V. まとめ

今回の調査は、関宿城を復元し文化施設として活用したいという地元の要望に関連したもので、関宿城復元のために発掘調査の側から検討資料を得るために実施された。調査の対象区域は、現在関宿町が管理している用地約2,440m<sup>2</sup>で、本丸跡の一部に相当する。本丸跡の大部分は江戸川堤防の建設により埋没してしまっているが、周辺の踏査で見る限り、三の丸以東に存在する久保町通り、小姓町通り、鷹匠町通りに分割される武家屋敷の町割等、城内の構成は比較的良く残されている。それらの詳細は今回の報告に譲ることにし、ここでは発掘調査により検出することのできた遺構、遺物について、その概要を述べておくことにする。

石垣跡は既に上位を取り壊されていたが、外面が垂直に積まれた石材や、比較的規模の小さい石材が用いられることを考えあわせると、本来の石垣高はそれほど高くはないものと思われる。また、石垣の方向は001号建物跡や002号建物跡の方向とも一致しており、石垣は東西にさらに連続するものと考えられる。正保年間に描かれた「諸国城郭絵図」によると、本丸の周囲は、西に逆川（河川改修前の江戸川）、北、東、南の三方に水堀が配されているが、今回検出できた石垣跡は堀から立ち上がるものではなく、本丸上の平坦面に築かれていた堀に伴なうものと考えられる。

次に、建物跡は三ヶ所に検出されている。今回の調査ではそれらの性格や規模について明確にし得なかつたが、柱穴痕の密集する002号建物跡では、比較的重量のある建物の存在が予想できる。位置的にも本丸の入口からは最奥にあたり、米や武器を貯蔵した倉庫として把えることができるだろう。

遺物は瓦、土師質土器、陶磁器等が出土している。このうち主体的に出土した棟瓦は、17世紀の後半に発明、18世紀に入り普及したと言われており、今回の調査ではそれ以前に使用されていたと思われる瓦の出土はなかった。陶磁器は、伊万里系の染付磁器と、瀬戸、美濃系の陶器と思われるものが主体を占めるが、それらはほとんど全てが18～19世紀に生産されたものである。内容的には日常雑器が多く、外国産のものは含まれない。このように17世紀以前の遺物はほとんど見られないことから、記録に残る久世重之の代の城建直しが実際に行なわれていたことを裏付けるものであろう。また、墨書きを含む土師質土器についても、その機能に祭祀的な側面を持つことが知られており、城の普請に伴なう地鎮具や、洪水等の災害を鎮めるためのものとして使用された可能性が高い。

以上その他にIV-6で述べた埴輪は、関宿城築造以前の当地に古墳が存在したことを窺わせるもので興味深い。今回は掲載できなかつたが、石鎚等の縄文時代遺物もわずかながら出土しており、関宿城以前の当地における土地利用等、今後更に検討されなければならない問題を多く提示したと言える。

#### 参考文献

- (財)千葉県文化財センター編「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区－」1985年  
中村正己編『境町の史跡』境町の文化財を守る会 1986年  
関宿城歴史資料調査団編『関宿城歴史資料調査報告書』 1986年  
関宿町教育委員会『関宿町史跡案内No.2』 1986年  
奥原豊爾『関宿志』関宿町教育委員会 1973年  
田淵実夫『石垣』法政大学出版局 1975年  
小和田哲男『城と城下町』教育社歴史新書 1979年  
佐賀県立九州陶磁文化館『国内出土の肥前陶磁』(展示目録) 1984年  
港区麻布台一丁目遺跡調査団編『郵政省飯倉分館構内遺跡』 1986年  
須田茂「第4章近世」千葉県企画部広報県民課編『千葉県のあゆみ』所収 1983年

# 図 版



1. 調査区遠景（北から）



2. 調査区遠景(北東から)



1. 石垣跡（南西から）



2. 石垣跡（西から）



1. 001号建物跡(西から)



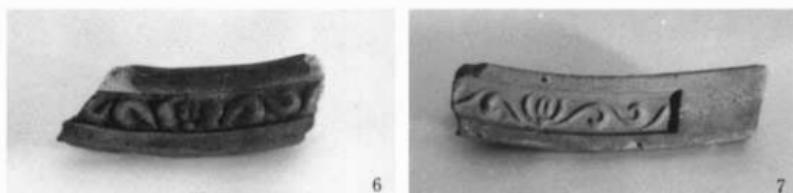
2. 002号建物跡(北から)



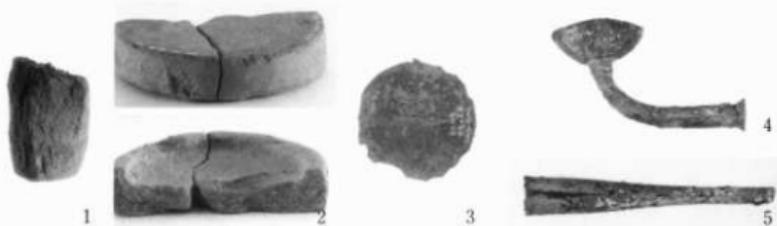
1. B3-03区 土師質土器出土状況(西から)



2. C4-01区 墓輪出土状況(北から)



1. 瓦



2. 羽口, 蓋形土製品, 鉛玉, 煙管



1



2



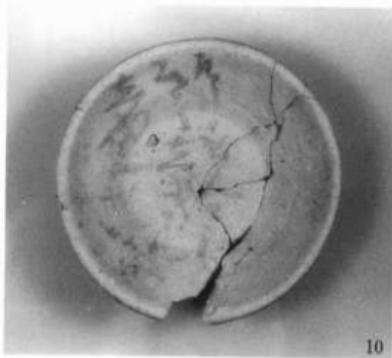
5



8



9



10



11



16



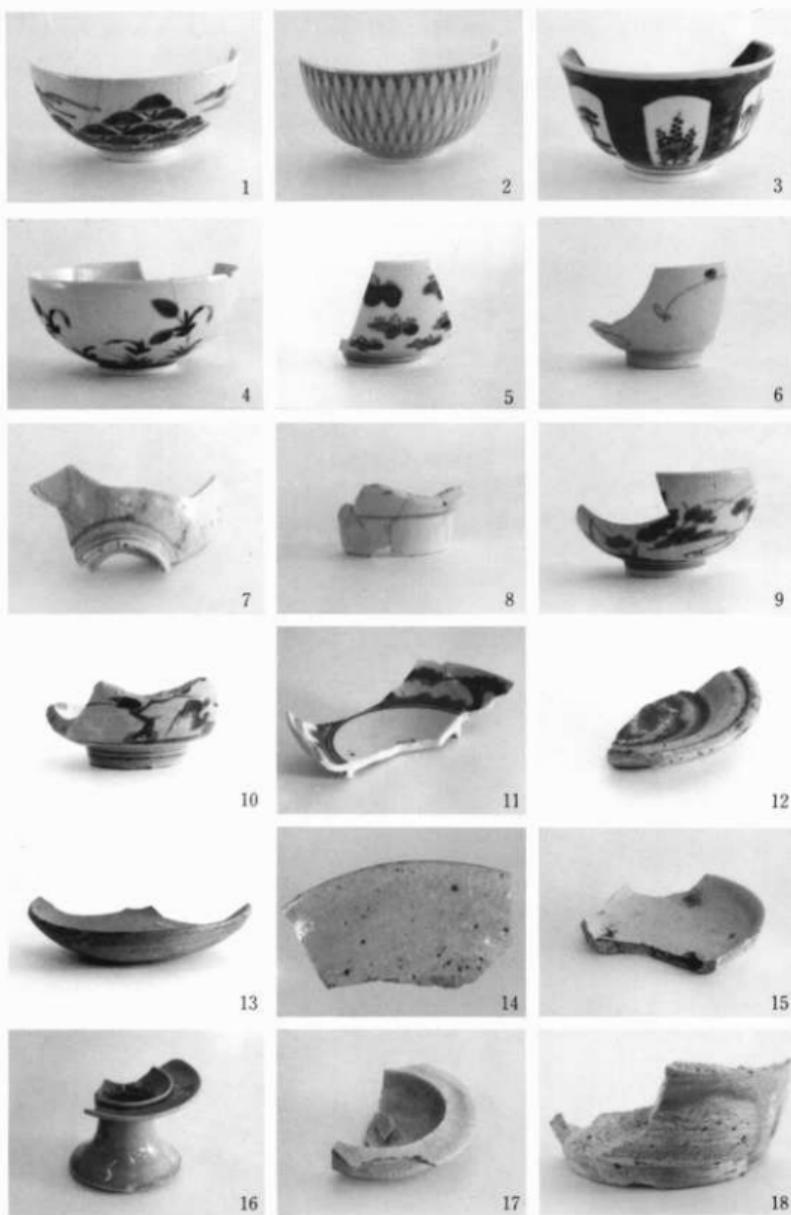
10



18



20



陶磁器

## 関宿城跡

—東葛飾郡関宿町久世田輪に所在する関宿城確認調査概報—

---

印刷 昭和62年3月31日

発行 昭和62年3月31日

発行 千葉県教育委員会

千葉市中央4-13-28 (0472) 23-4080

編集 財団法人 千葉県文化財センター

千葉市葛城2-10-1 (0472) 25-6478

印刷 有限会社 正文社

千葉市都町2-5-5 (0472) 33-2235

---